

妙見祭笠鉾のヒミツ

笠鉾の始まり



本蝶蕪から迦陵頻伽までの8基の笠鉾が妙見祭に出るようになったのは江戸時代の天和・貞享頃(1681～1687)と言われています。最初は簡素であったものが次第に豪華なものになっていったようです。

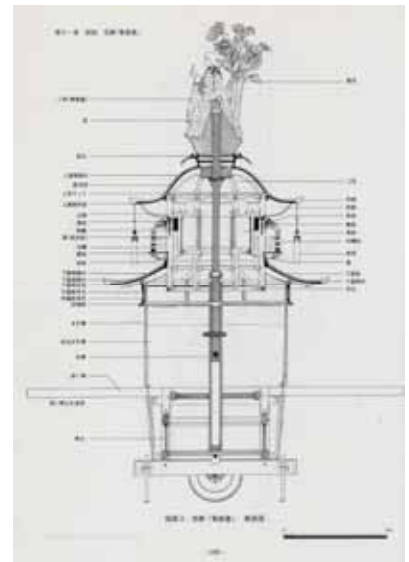
菊慈童はそれよりも早く妙見祭に出ていたようで、松井家文書には菊慈童の移り変わりが記されており、それによると、最初は図のように1人で持つ傘状のものであったことがわかります。傘の上には町名のついた飾りがついていました。その後、元文3年(1738)に他の笠鉾のように二重の笠に菊慈童の飾りのついた4人持ちのものになり、さらに大型化して現在の笠鉾になりました。

笠鉾菊慈童初期の姿(推定図)

中はどうなっているの？

外観は建物のようですが、中を見ても中央の柱1本で支え、伊達板や水引幕などの部材はすべて上屋根から下がっています。

傘の構造を残したまま大型化したのが八代の笠鉾です。



笠鉾って何？



笠鉾の初期の姿は、町の名前が記された飾りのついたものでした。

長崎くんちの傘鉾は、町の印として趣向を凝らした出しものの先を行き、プラカードの役目を担っています。

各傘鉾を見ると、町の由来や奉納踊りに因んだ飾りが付

けられ、一目見ればどこの町とわかるようになっています。

八代の笠鉾も長崎同様の役割を持っていたと思われますが、大型化し豪華になっていく過程で様々な装飾が加えられ、笠鉾の飾りから町の名前が消えてしまいました。

本町の本蝶蕪だけが町印の面影を残しています。

「本」「蝶＝町(読みが同じ)」「蕪＝株と言われています」で一目で本町の笠鉾である事がわかります。



笠鉾の飾りはずっと同じ？



笠鉾の一番上の飾りはずっと同じだったわけではありません。例えば、「恵比須」は明和元年より前は「桐に鳳凰」でしたし、19世紀初頭に作りかえられたと思われる「松」もそれ以前は「孔雀」でした。

「松」になる前は「孔雀」だった平川原町の笠鉾

また、二之町のようにある「蘇鉄」と「諫鼓^{かんこ}」を交互に使い分けていたこともある笠鉾もあります。諫鼓とは、中国の伝説上の堯、舜、禹が施政について諫言しようとする人民に打ち鳴らさせるために朝廷の門外に太鼓を設けたが、善政を行ったので太鼓歯鳴ることもなく、いつしか苔むし鶏の遊び場となったという話が元になったもので天下泰平の象徴であると言われています。

笠鉾は絵巻では担いでいるみたいだけど？



笠鉾にタイヤがついて曳くようになったのは、昭和 20～30 年代にかけてです。それ以前は、山仕事など力仕事をしている人たちを雇って担いでいました。笠鉾で最初にタイヤがついたのは通町の西王母で、昭和 22 年のことでした。

約 200 年前の笠鉾松



担いでいた頃の笠鉾松

松にタイヤがついたのは昭和 38 年です



現在の様子